

日本古典にみる性と愛

中村真一郎



新潮選書

現代は歴史的にあらゆる文化的な価値が、改めて
問い直されている。そのなかで特に愛と性とのか
らまり合いの意義は、二十世紀の最も重要な思想
的及び生活的な課題として、注目されつつある。
それはあらゆる人にとって、他人事として見過す
ことのできない、深刻な問題である。私はこの難
問に直面するために、わが国の伝統的な古典のな
かに、各時代の日本人の性愛についての実体と思
考とを探ろうとした——

著者

日本古典にみる性と愛

中村真一郎

新潮選書



にほんこてん せい あい
日本古典にみる性と愛

〈新潮選書〉



© Shinichirô Nakamura, Printed in Japan, 1975

（乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

昭和五十年十月三十日 発行
昭和六十三年五月二十日 十五刷

著者 中村真一郎
発行者 佐藤亮一
印刷 錦明印刷株式会社
製本 株式会社 大進堂

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
電話業務部 (0303) 二六六―五一一
編集部 二六六―五四一一
振替 東京四一八〇八番

ISBN4-10-600176-4 C0391

価格はカバーに表示してあります。

日本古典にみる性と愛 目次

	はじめにⅡ意図と主題	9
1	倉梯山Ⅱ『古事記』	12
2	童子女の松原Ⅱ『日本書紀』と『風土記』	16
3	垂乳根の母Ⅱ『万葉集』の一	19
4	蒲生野Ⅱ『万葉集』の一	24
5	白銀の時代Ⅱ『万葉集』の三	28
6	永遠の処女Ⅱ『竹取物語』	32
7	「好色」の誕生Ⅱ『伊勢物語』	35
8	新しい遊戯Ⅱ『古今集』	38
9	覚めた眼Ⅱ『宇津保物語』と『平中物語』	42
10	夫婦の愛欲Ⅱ『蜻蛉日記』	46
11	社交界Ⅱ『枕草子』	49
12	紳士の条件Ⅱ『源氏物語』の一	53

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
細君品評Ⅱ『源氏物語』の二	恋愛年齢Ⅱ『源氏物語』の三	女房生活Ⅱ『紫式部日記』と『和泉式部日記』	苦しむ能力Ⅱ『狭衣物語』と『夜半の寢覚め』	愛染明王Ⅱ『理趣経』と『医心方』	乳房の驗証Ⅱ『大鏡』	心変わりⅡ『今昔物語』	ソドムとゴモラⅡ『とりかへばや』	血の迷路Ⅱ『浜松中納言物語』	忍ぶ恋Ⅱ『新古今集』	白拍子Ⅱ『平家物語』と『建礼門院右京大夫集』	「玉の盃」Ⅱ『徒然草』	サド侯爵風Ⅱ『とはすがたり』
.....												
57	60	64	68	72	75	78	81	84	87	91	94	97

26	八幡宮社前Ⅱ『吾妻鏡』	100
27	封建道徳Ⅱ『曾我物語』と『義経記』	104
28	あまり言葉のかけたさにⅡ『梁塵秘抄』と『閑吟集』	107
29	かすみの衣Ⅱ『犬筑波集』	111
30	庶民のための小説Ⅱお伽草子	115
31	悲劇と喜劇Ⅱ能と狂言	118
32	カリタスとアモールⅡキリスト教文学	121
33	添寝と唐舟Ⅱ戦国書簡	124
34	男色と女性優位Ⅱ『醒睡笑』	128
35	世之介Ⅱ西鶴	131
36	心中と姦通Ⅱ近松	135
37	女性気質Ⅱ八文字屋本	139
38	『物のあはれ』Ⅱ宣長と『西山物語』	143

39	幽霊と異類Ⅱ『春雨物語』と『雨月物語』	146
40	貞潔と淫蕩Ⅱ『赤城梅花記』	149
41	遊里の風俗Ⅱ竹枝詞	152
42	甘美なめおとⅡ『追思録』	158
43	性風俗の展覧会場Ⅱ狂歌と川柳	162
44	三角関係Ⅱ馬琴と春水	168
45	ボルノグラフィーⅡ京伝と種彦	171
46	粹と野暮Ⅱ三馬と一九	175
47	悪人Ⅱ南北	179
48	白浪と毒婦Ⅱ黙阿弥	182
	おわりにⅡ近代から現代へ	185
	附記	188

日本古典にみる性と愛

はじめに Ⅱ 意図と主題

私はこれから、幾回かにわたって、日本文学のなかに現れている男女のあいだの愛、恋愛から夫婦愛に至る、その種々相を指摘してみたい。

なぜ、そのようなことを、今、とりたてて試みるかといえば、まず「種々相」ということであるが、今日、一般に古典解釈のなかに、人間の本性から発したものととして、疑うことなく提出されている性道德への、常識的見解そのものが、実は大概、近代になってから発生したものに過ぎない、という事実があるからである。

私たちは少年時代以来、いつの間にか古典のなかの男女関係について、近代的道德観によって判断することに慣らされて来ている。作中人物の行為は「身の上相談」的感覚によって、無意識のうちに、道德的判断が下されている。

たとえば、『源氏物語』の主人公、光源氏は、近代的道德観からすれば、色情狂的放蕩者である。それを多くの今日の評者は、彼が個々の女性に対して誠実であった、という理由によって弁

護しようとする。

しかし、そうした誠実さと言うものも、また近代的道德感覚によるものであり、あの作品を生んだ平安朝中期においては、男女間の交際における最高の規範となったものは、誠実さとは別のものであったろう。

それから、また、光源氏を弁護するものは、彼がその多妻的行為にもかかわらず、家庭のよき夫であったと言う点を強調する。

しかし、この家庭中心の生き方というのも、また、近代的美德に過ぎないのである。

そのように反省して行くと、日本の文学に現れている性愛は、その時代時代によって、まことに多様であることに、改めて気付かされるだろう。

そうして、その種々相に直面するには、まず、私たちの眼から近代的道德観念を外すことが必要なのである。

たとえば、人は本質的に一夫一婦制を願うものである、と言うような偏見を捨てることが大事である。ひとりの女性だけを愛することが、多数の女性を同時に愛するのよりも高級である、という考え方は、近代社会の生んだものに過ぎないことを、忘れないようにすることである。

そうした自由な観点は近代的道德観への挑戦となり、そして多くの（特に女性の）読者にとっては不快かも知れない。しかし自分に不快であるからと言って、古典そのものの価値を否定したり、またその解釈を自分の道德観に合致するように歪める、と言うことは愚かな狭い心である。

もし、男女の性愛が、人間の本性から発するものだとしても、その発する形には、近代的な形

以外に、様々の形がある、と言うことを知るのは有益である。

特に、現在、有益なのだと私は判断する。だから、今、それを試みようとするわけである。

なぜ、現在、有益なのか。

私は現在は、世界的に歴史的な転換期にさしかかっており、そしてそのために、近代の道德観そのものも、大きく揺らいできていると言う認識に立っている。

その性意識においても、ある人たちは英国ヴィクトリア朝的な健全で偽善的な立場を守り、ある人たちは既に一夫一婦制への信頼さえ放棄して、自由性愛の習慣に踏みこんでいる。

要するに、現代の社会は、ひとつの共通の性意識を持ち、ひとつの共通の性道德の支配下にある、と言う状態ではなくなっている。

多様の価値観の同時共存は、性の領域にも、あるいは、この領域にこそ露骨に現れているように見える。

人類はいずれまた、ひとつの新しい性道德を作りあげることになるのかどうか。今、私は速断しようとは思わない。

私はむしろその多様性そのものを、充分、認識することに、強い興味を持つ。そして、その認識の一助として、日本人の伝統を振りかえって見たいのである。

そうして、その各時代への検討を一巡しおえた後に、その多様性にもかかわらず、日本人の性愛の特殊性というものが現れて来れば、更に面白いと思っている。

1 倉梯山くらはし 『古事記』

古代の男女関係で、現代人の道德感覚からして最も奇妙に感じるのは、幾多の近親婚の実例であるが、それは古代世界のいずれの文明圏にも見られる現象であって、たとえばエジプト古王朝においては、王は同母の姉妹と結婚している。これは血統を尊ぶという宗教的思想の、極端に純粹化せられた現象であって、近代の遺伝学の見地からの批判の外にあるものである。

また部族連合のうえに立っている支配者は、現代でもアラビア文化圏のある首長が実行しているように、次々と各部族の長の娘を后とすることによって、その政治的基礎を固めて行った。そうした複数の結婚によって、多くの子女が、それぞれの母のもとに生まれ、その子供たちはいわばひとつの交際圏を成立させた。そこで異母兄妹のあいだの恋愛や結婚が、今日における同一の階級グループ内の結婚と、同じ感覚で受け入れられていたようである。

『古事記』や『日本書紀』には、そうした実例は、当時の道德感覚からすれば当然の、日常的習慣として、無数に記述されている。

たとえば五世紀初頭の仁徳帝の宮廷においては、帝は二人の異母妹を妻としたが、そのひとりである八田やたのわきいらつめ若郎女めどりのむすめの更に妹の女鳥王めどりのみをも、新たに妻として招こうとした。同母姉妹を共に妻とす

1 倉梯山

るということも、当時の習慣のなかにはあったので、現に仁徳帝の父の応神帝の妃の場合にもそれが見られる。

ところで、この女鳥王は、帝の使者として来た皇弟の速総別王と恋愛におちいり、そして結婚してしまふ。

この結婚は、妻の女鳥王が夫を帝位につけようという野心を抱いたために、不幸な結末をとげてしまふが、その破滅はけっして、彼等の血族結婚のせいではない。

この二人は『古事記』のなかで、まことに仲のいい甘美な若夫婦として描かれている。

二人が反逆の疑いで、天皇の軍に追われて、倉梯山に逃げた時、夫の方はこう歌っている。

梯立の倉梯山を嶮しきと

岩懸きかねて我が手取らすも

けわしい崖をよじのぼるのに、そのかぼそい腕では、岩に手をかけることもできなくて、私の手にすがりつくのがいじらしい……

この若い男女の愛恋の情は、まことに自然であり、近代の異母兄妹というものとは、全く別のものである。

それぞれの母のもとに、生れた時から育っていた子供たちは、母が異なれば、同一の家庭の一員であるという意識が、お互いのあいだには全くなかったのである。そこに存在したのは、同一

の社会的グループ内の親和感であり、違和感はむしろ異なる階級の男女のあいだに恋が生れた時に発生したのである。

こうした近親婚は、異母兄妹のあいだばかりではない。たとえば、日本の統治権に関する古い神話のなかに、すでに別の例が登場してくる。

それは天上の世界、高天原を支配する女神天照大御神によって追われて地上に下った弟神須佐之男命の一族についての血縁関係のなかに面白い実例として現れる。

須佐之男命は地上の支配者となり、出雲を統治するのだが、その統治権は長男の八島士奴美神に譲られる。

この神は数人の妻によって、実に八十人の男神たちを得たと、伝えられている。その八十人の兄弟のあいだで、今度は統治権が争われることになる。

そして、そのひとりである大国主命は兄弟たちから様々の迫害をうけることになる。そのためには母は、今、黄泉の国にいる彼の祖父の須佐之男命のもとに庇護を求めるように忠告する。

そして根堅洲国へついた大国主命は、そこで祖父の娘、須勢理毘売と出会い、忽ち熱烈な恋愛におちいって、婚約を交すことになる。

これは、近代風にいえば甥と叔母との結合であって、不倫の最たるものである。しかし、古代の人々がこの神話を自然に受けいれているということは、そのような肉親の結びつきに不潔さや恐れを感じることがなかったということを示している。

こうした神話における血縁関係というものは、背後に、異なる社会集団の結合という歴史的事